

『子どもの成長に願いをこめた「やぎみるく」の取組』 かすやぐんうみまち KOYASU FARM（福岡県糟屋郡宇美町）

【取組の概要】

宇美八幡宮*の「安産祈願」を形にした商品を移動販売車を使って販売し宇美町のPRと地域活性化を目的としての取組。

2015年（平成27年）からヤギを飼育し、栄養価が人間の母乳に近く昔から子育ての際に飲まれてきた「やぎみるく」を生産。2018年（平成30年）に「産み育てる町うみまち×やぎみるく」を掛け合わせた子どもの誕生と成長への願いを込めた「やぎみるくアイス【産み愛す】」を開発し、販売を開始。町政100周年を機に新たな歩みを進めたいとの思いから、産み育てる町うみまちの地域活性化に取り組む。



やぎみるくアイス「産み愛す」

* 宇美八幡宮は古くから「子宝・安産・育児」の信仰を集めている。

【取組の現状】

子育てに縁起のある宇美八幡宮という地域資源を活かし「大安・戌の日」※に加工した「やぎみるくアイス【産み愛す】」を開発。味は福岡県を代表するブランド農産品の八女茶、いちご（あまおう）を加え、顧客訴求力を高めた。

※「大安・戌の日」は、安産祈願に縁起が良いとされる。

宇美町の新たな特産品として、各種イベントに出店。農産物加工品の普及イベント「博多ファーマーズマーケット」や地場産品のPRのために行われている「福マルシェ」等の大規模催事に移動販売車で出店。

コロナ禍によりイベントの中止が増え販売が限定的になった際には、クラウドファンディングに挑戦し、オンライン販売による全国展開を開始。また、宇美八幡宮と連携し境内で販売を開始するなど地域連携に取り組んだ。また、ヤギ糞堆肥を活用してサツマイモを栽培するなど循環型農業の取組を開始。



【取組の展望】

イベントや観光客も増え、キッチンカーも二台体制となり「やぎみるくアイス」の販売も順調に増加。今後は、宇美町の魅力発信や地域活性化のため、親子ヤギと触れ合うことで子育ての尊さを伝えていく観光牧場を目指し飼養頭数の増加を検討している。

また、放置竹林の解消に向けた対応として、竹を活用した飼料化を検討。放置竹林を減少させることで森林保全、土砂災害防止と景観保全に貢献したい。

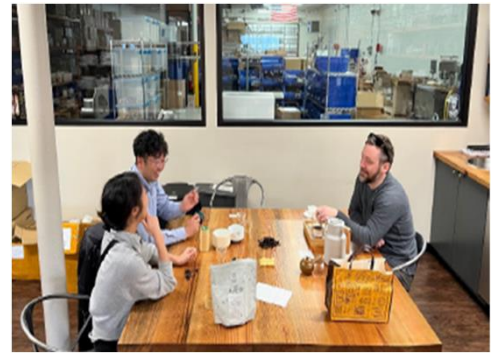
『産地の特色を活かした 生産・流通・消費が連携したモデル的な取組』 東そのぎ上地区活性化協議会（長崎県東彼杵町）

【取組内容】

東そのぎ上地区活性化協議会は、平成28年に長崎県東彼杵町のお茶農家により組織された協議会で大村湾の潮風が吹き抜ける山あいにて育てられた茶葉を使った商品を開発し国内外に販売している。

長崎県東彼杵町は中山間地域に位置し、昼夜の寒暖差が大きいなどお茶の栽培に適した環境であることから、お茶は地域の基幹作物であり重要な産業である。

後世に茶産業を引き継ぐために、積極的に新商品開発やプロモーション活動に取り組むとともに、バイヤーに対するアンケート調査による実需者のニーズ把握にも努め、取引先の要望に対応している。



実需者との情報交換

【取組に至った経緯】

長崎県東彼杵町にて生産される茶葉は年間約450トン、県内茶葉の60%を占め、蒸し製玉緑茶の部門では平成29年から4年連続で農林水産大臣賞を受賞するなど、高品質な茶を生産する産地であるが、近年は、国内需要の低迷により茶価は低下傾向である。

一方、海外では健康志向や日本食への関心の高まり等を背景に、抹茶を含む粉末茶の需要が拡大している。

東そのぎ上地区活性化協議会は、高品質な茶の販売を促進することによる地域の活性化を図るため、地域生産者、茶販売店及び輸出業者等関係者が連携し、地域で生産されるお茶の収益性向上に向けた新商品を開発、海外プロモーション活動を行っている。

【取り組む際に生じた課題と対応】

海外向けに令和元年から^{てんちゃ}碾茶（抹茶の原料）の生産を開始したが、新型コロナウイルス感染症の長期化により、海外プロモーション活動縮小やインバウンド需要を獲得できない状況であった。

近年は、感染予防しながら海外渡航やインバウンドが増加してきていることから、商品開発の促進、対象国を拡げてのプロモーション活動を積極的に行っている。

【取組の成果】

アンケート調査等により実需者のニーズに合った商品開発（抹茶濃縮液、抹茶ラテ）が進み、海外でのプロモーション活動により販路が拡大。生産者の所得向上及び地域農業の活性化に貢献している。

【今後の展望】

アメリカなど需要拡大している海外販路の維持、拡大のために、抹茶商品の開発や蒸し製玉緑茶の高品質化に取り組む。

展示会やカフェでの試飲会だけでなく、東そのぎ地区茶畑のプロモーションPVを作成し、アピールしていく。



開発した商品

『地域未利用資源（米ぬか液）を活用した飼料の生産』 出水市エコフィード推進協議会（鹿児島県出水市）

【取組内容】

無洗米の製造過程で排出される米ぬか液を発酵させた米ぬか液発酵液体飼料（リキッドフィード）の生産を推進するべく、米ぬか液排出事業者、養豚生産者及び出水市からなる「出水市エコフィード推進協議会」を設立（令和2（2020）年度）し、リキッドフィードの給餌が飼料費や豚の増体、肉質に与える影響等の実証を行った。

【取組に至った経緯】

無洗米の需要が高まる中、米ぬか液の処理量が増え、処理にかかる経費が嵩んでいることが課題となっていたため、米穀販売事業者から養豚事業者へ飼料利用の相談が出水市にあったことを受け、協議会が設立される運びとなった。

【取り組む際に生じた課題と対応】

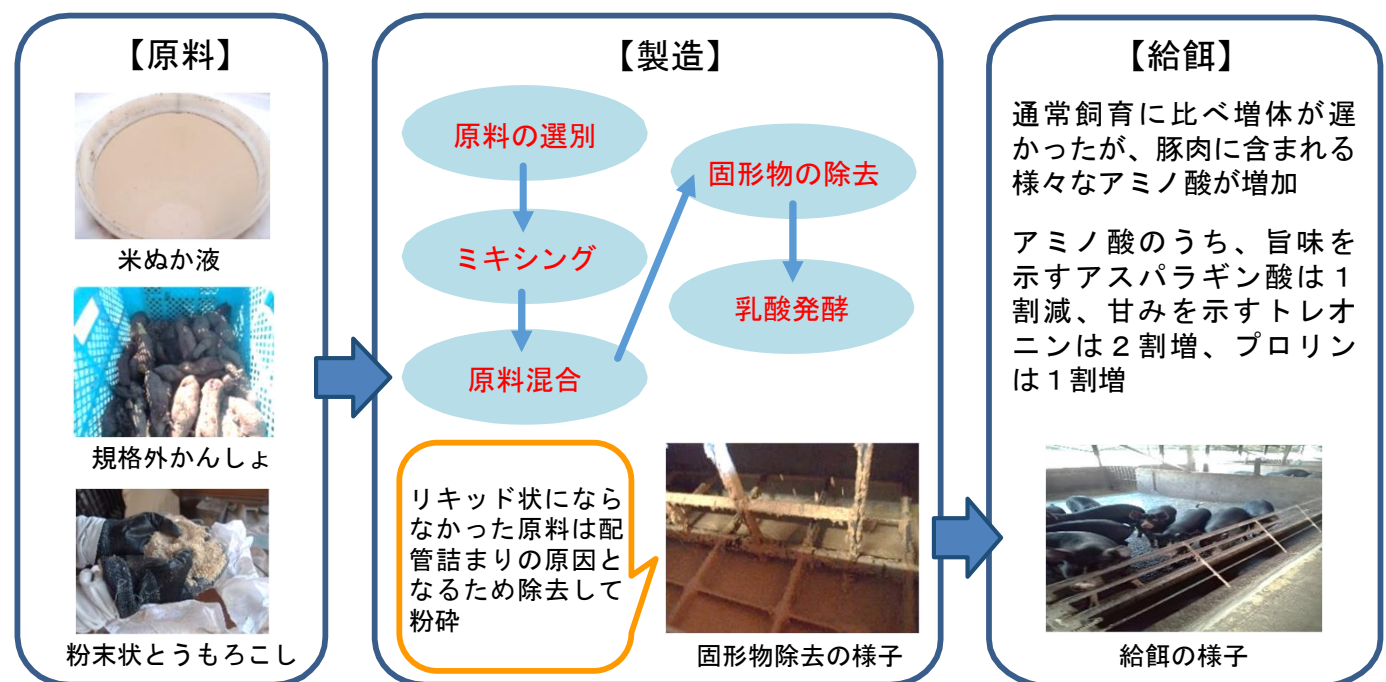
米ぬか液単体では栄養が不足することから、これを補うためには副原料を混合する必要があった。米ぬか液のほとんどは水分であることから、乾燥して粉末化し、副原料と混合することが望ましいが、コストが高くなるため実用的ではない。

そこで、原料となる米ぬか液に規格外かんしょやとうもろこし等の副原料をそのまま粉碎して混合し、乳酸発酵させることによって嗜好性と保存性を高めた。

【取組の成果】

黒豚の肥育における1頭当たり飼料費については、通常区で43,920円（488kg×90円）のところ、実証区では16,000円（400kg×40円）となった。

しかし、豚への影響として、リキッドフィードのみで粗タンパク質の必要量を満たすには大量の飼料を摂取する必要があるが、栄養素の消化吸収に必要なエネルギー量が固形飼料以上に必要となってくる。このため、リキッドフィードの栄養価を見直すことが利用促進に繋がることから、試験研究機関等の助言を仰ぎながら取り組んでいく。



【今後の展望】

飼料資源をさらに活用するためには、これまで取り組んできた課題の解決や、未利用資源のみならず、新しい飼料資源（笹、もみ殻、木質資源等）を利用した飼料製造実証に取り組み、事業を推進していく。

令和5年度未来につながる持続可能な 農業推進コンクール（農産局長賞） 有限会社育葉産業（大分県豊後大野市）

【取組内容】

大分県豊後大野市において、「システム化した経営で儲かる脳業^{*}」の実現に向け、平成4(1992)年にみつばの水耕栽培を開始した。

現在、栽培面積7,300m²（鉄骨ガラス温室）で周年栽培（12回作付/年）を行っており、平成18(2006)年12月に大分県第一号として水耕みつばでJGAP認証を取得した。

^{*} 考えて儲かる農業という表現で、「農」を「脳」に置き換えている。

【取組に至った経緯】

「根拠ある安全」を求めてGAP認証を取得し、生産工程管理の改善に日々取り組んでいる。なお、代表者（栗田洋蔵氏）は、過去に日本GAP協会の理事を務め、JGAP基準書の作成に携わっていた。

【取組の成果】

農場ルールを策定し、スタッフとの朝礼やミーティング等を実施し、農場管理の記録作成や保存について注意喚起を行うなどスタッフ全員の意識統一を積極的に行い、業務改善に活かしている。

従業員の働きやすい環境を整備するため、今までに蓄積された栽培管理データから収穫予定日に応じた生育日数を算出し、連休や年末年始等に従業員等が計画的に休日を取れるように年間スケジュールを作成している。

農場安全マニュアルを策定し、機器の安全な取扱い等を定めるとともに、時間を決めて体操を実施するなど、事故やケガ防止に取り組んでいる。

自社のホームページに生産履歴や残留農薬分析結果等を掲載し、消費者等への情報発信を行っている。

市場担当者との市況などの情報共有データもパスワードで保護して閲覧できるようにしている。

また、GAPの考え方、導入の経緯、自社の取組事例について、同ホームページで詳しく説明し、GAPの農業者への普及啓発や消費者への理解を推進している。

【今後の展望】

GAP取り組み等の普及啓発を通して、地域の発展への貢献や農業後継者支援の活動を継続したい。



ガラス温室



みつばの水耕栽培

全市場担当者を参集し出荷会議を実施し情報共有を図っているとともに年1度は市場を訪問し仲卸との交流を行っている

出荷日から季節ごとの栽培期間を勘案し、播種・栽培計画を策定

出荷実績・次週の出荷予定を毎週共有し、喜ばれる産地になるように努力

計画的な栽培で必要な時に必要な量を出荷
従業員の休日を確保し働きやすい職場環境
～GWや年末年始は休日～

11月	日	月	火	水	木	金	土
	5	6	7	8	9	10	11
					16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25

12月	日	月	火	水	木	金	土
	3	4	5				
	10	11	12				
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30
	31	1/1	2	3	4		

休日の確保、計画的・安定出荷

『カンキツの計画出荷によるスマートフードチェーン』 JA長崎せいひ柑橘部会（長崎県長与町ほか）

【取組内容】

JA長崎せいひ柑橘部会では、極早生から伊木力系の普通温州、中晩柑まで様々なカンキツが生産され、全国の卸売市場へ出荷している。今回、生産原価を抑えた低コスト省力栽培体系を導入するとともに、消費動向に即応したカンキツの出荷体制の構築について検討した。

【取組に至った経緯】

社会情勢の変化を受け、生産原価を抑えることや、消費動向に対応した高品質果実が求められるようになった。カンキツ栽培にクラウドを活用した自動灌水システム、プレ選果機、AI貯蔵庫といったスマート農業技術を導入することにより、低コスト省力化栽培体系を確立し、生産者の収益と消費者の満足を実現する生産体制を実証した。



みかんマルチ栽培園

【取り組む際に生じた課題と対応】

スマート農業技術の導入によって収量を確保しつつ高品質果実を生産・出荷できたとしても、付加価値を高く評価する販売が確立しなければ、技術導入コストが高いため利益が出ない。本実証では、クラウド型マルドリ栽培*による高糖度果実の生産と、AI貯蔵庫を用いた早生みかんの長期貯蔵による越年販売の実現により、高付加価値化が可能になった。

*カンキツ栽培において、自動化システムによる灌水施肥をマルチの下に敷設した点滴チューブによって行う周年マルチ灌水同時施肥法の略称。

【取組の成果】

クラウド型マルドリ栽培により高品質果実の収量が向上した。さらに、営農指導支援システムの導入やプレ選果機による家庭選果の省力化及び出荷調整が可能なAI貯蔵庫の導入により、的確な営農指導の実現と販売・流通状況に即応した計画出荷体制を確立した。



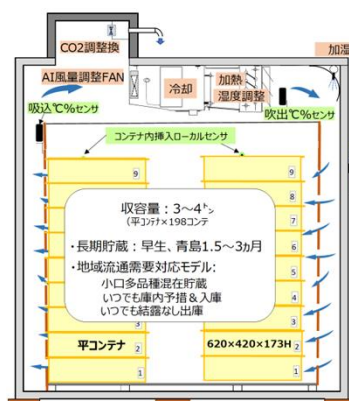
AI貯蔵庫



プレ選果機

【今後の展望】

県と関係機関とで組織する「ながさきスマート農林業推進会議」に成果を報告し、県内の産地へ速やかに普及を図る。また、農業データ連携基盤（WAGRI）との連携はもとより、農業分野を超えて、食品・流通業界や食品小売業にも普及を図る。



AI貯蔵庫の仕組み



プレ選果ライン

【問合せ先】九州農政局生産部生産技術環境課 TEL 096-211-9111（内線4524、4477）